

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02900

研究課題名(和文)宋代士大夫家族の構造分析と階層移動に関する計量的研究

研究課題名(英文)The Structure of Elite Family in Song China

研究代表者

遠藤 隆俊 (ENDO, TAKATOSHI)

高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・教授

研究者番号：00261561

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中国の家庭、家族、宗族の構造と概念規定を再検討した上で、蘇州の范氏家族を題材に、宋代士大夫家族の階層移動と日常生活、族譜の史料性について計量的に分析を行った。その結果、階層移動は多くの士大夫家族に見られたが、宗族という枠組みで見れば、階層移動は少ないことがわかった。また范氏の人数は北宋時代に上昇し、南宋時代に安定し、元代にまた上昇したことが判明した。これは彼らの社会的身分の上昇、安定が原因である。さらに彼らの族譜である『范氏家乗』の資料的価値を検討した結果、この資料は遠く宋代にさかのぼることが明らかとなった。その意味で、范氏の族譜は宋代史料としても有効であることが判明した。

研究成果の概要(英文)：The social mobility of the elite families was very high in Song China, but it was more lower from the perspective of clan and lineage. The population of Fan family rapidly increased during North Song dynasty, while it did not increased during South Song dynasty. It is the reason why the Fan family had a lot of elites and government officials during North Song dynasty. Though the document of Fan family was edited during Ming and Qing dynasty, but it has many materials of the conditions during Song dynasty. So it is very useful to research the condition of Fan family during Song dynasty/

研究分野：東洋史学

キーワード：蘇州范氏 宋代 中国 家族 宗族 士大夫 階層移動 族譜

1. 研究開始当初の背景

(1) 中国宋代社会の支配層である士大夫については、社会文化史の観点から多くの研究が行われている。とくに近年、社会学や人類学の視点を取り入れた家族、宗族の観点からアプローチする研究が増えてきた。しかし、士大夫家族の存続問題は十分に解決されておらず、彼らの階層移動や社会的流動性については、依然として未解明のままである。

(2) 一方、日本の中国家族、宗族史研究は古くから行われており、非常に多くの研究蓄積がある。とくに明清近代史においては、人類学の影響もあり、研究が急速に進んでいる。宋代史研究においても士大夫研究を中心に多くの論考が発表されているが、宋代は明清に比べてまだ宗族と呼べるほどの大きな組織が形成されていないため、明清史ほど多くの成果があがっていない。

(3) さらに、近年の中国家族、宗族史研究においては、「家庭」という新たな分析概念が中国や台湾において導入され、日本の研究との意思疎通が十分に行われていない状況にある。研究のグローバル化が進む中、家族、宗族史研究においては、むしろ研究の分断化や細分化が進みつつある。

2. 研究の目的

(1) 如上の認識を踏まえた上で、本研究では、まず家庭、家族、宗族の概念と定義を明らかにし、研究の出発点を共有することを目的とした。家庭や家族、宗族と言っても、実は日本の概念と中国、台湾の概念とは全く異なり、議論の多くがかみ合っていない状況にあるからである。

(2) 併せて、中国における家庭、家族、宗族の組織と構造、秩序について、理論的な考察を行うことを目的とした。同様の研究はこれまでも数多くあるが、家庭と家族、家族と宗族を明確に区別した研究はあまりなく、三者が渾然一体となって論じられていることが多いからである。

(3) そして第三に、宋代士大夫家族の階層移動や日常生活について、計量的かつ生成論的に明らかにすることを目的とした。従来の研究では家庭、家族、宗族が明確に区分されず、士大夫の階層移動や社会的流動性と言っても、どのレベルの議論なのか、十分に明らかにされてこなかったからである。

3. 研究の方法

(1) 本研究ではまず中国、台湾、日本における家庭、家族、宗族の概念を現代語および宋代の古典史料について整理することにより、用語の定義を明確にし、研究概念の統一化を図ることとした。

(2) 中国家族、宗族の構造をとらえる上で重要な制度は、「五服」と呼ばれる喪服の概念である。これは親族の親疎によって喪服の質や種類を分けた制度であり、この「五服」の構造を分析することによって中国家族の秩序構造を明らかにすることとした。それにより、これまでに論じられてきた「尊尊」「親親」の原理や「差序格局」の秩序構造を見直す手がかりとする。

(3) 宋代士大夫家族の研究対象として蘇州の范氏を取り上げ、彼らの族譜である『范氏家乗』を計量的に分析する方法を取った。それにより、士大夫の階層移動や婚姻、生育など日常生活の実態を300年というタイムスパンの中で考察した。蘇州范氏は千年家族と言われ、宋代から明清近代まで続いた家柄であり、本研究には最も良い研究材料である。

4. 研究成果

(1) 現代の日本語と中国語の家族概念を整理、分析した結果、日本語の家庭、家族、宗族と中国語の家庭、家族、宗族には、大きな違いがあることがわかった。日本語の家庭と家族には規模や範囲に大きな違いはないが、中国語の家庭と家族は全く違うものである。すなわち中国語の家庭は日本語の家族にあたり、中国語の家族は日本語の親族にあたる。つまり中国語の家族は、日本語よりもかなり広い概念であることが判明した。

(2) 宗族の概念についても同様であり、日本でも中国でも宗族が男系血縁親族であることは共通している。しかし、日本で言う宗族とは五服以内のいわゆる「小宗」も宗族に含まれるが、中国語でこれは家族の範囲にあたる。これに対して、中国語で宗族と言えは「五服九族」を越えるより大きな親族範囲であり、いわば「大宗」が統括する範囲であることが明らかとなった。

(3) 宋代の有名な朱熹「家礼」を見ても、ここで想定されているのは五服の範囲であって、これを宗族とみなして研究を進めることには困難がある。この概念の違いを十分に認識しないと、同じ家庭、家族、宗族の研究を行っても、日本と中国、台湾では議論がかみ合わない場合が出てくる。今後は、日本と中国、台湾における研究用語の統一、および議論のすりあわせが必要と考えられる。

(4) 以上の検討を踏まえ、中国における家庭、家族、宗族の秩序と構造について考察した結果、家庭と家族は連続する秩序と構造を持つが、宗族は家庭、家族とは異なる秩序、原理を持つことがわかった。すなわち家庭、家族には五服の秩序が適用され、タテの統属関係とヨコの親和関係を内包するピラミッド型の構造であることが判明した。

(5) これまでの研究でも、中国家族の構造をタテの「尊尊」原理とヨコの「親親」原理で説明する論者は存在したが、この両者が相互に関連してピラミッドの構造であることを明らかにした研究はない。その意味で、本研究がこれまでの研究に加えて、新たな指摘をしたことは重要である。また家庭と家族が相互補完的な役割を担ったことも、本研究によって明らかになった。

(6) これに対して、宗族とは五服の範囲を越える親族であり、宗族そのものには五服の関係が適用されない。血筋や系譜の面で家庭、家族と宗族が連綿と繋がっていることは歴然としているが、家庭、家族とは違って宗族には喪服の秩序と原理が適用されなかった。宗族に適用された原理は、「子孫はみな平等」すなわち宗族の構成員全員が平等であるという「均」の理念と秩序であり、血筋の親疎によって親族を区別する差序の原理ではない。

(7) 社会的機能の面でも同様であり、家庭、家族は構成員の生活を直接に支える組織であるが、宗族はこれを間接的に支える互助的な組織と言える。その意味で、家庭や家族には「差序格局」の秩序、原理を適用することは可能であるが、宗族にこの原理を適用することは困難である。宗族はむしろ家庭、家族を助けるセーフティネットの役割と機能、そして家庭、家族を覆うネットワークの組織、構造になっていたのである。

(8) 蘇州范氏を題材に宋代士大夫の社会的流動性を計量的に分析した結果、個々の房や家族を見ると確かに社会的な上昇や没落、すなわち階層移動が大きく起こっていたことが明らかになった。しかし、これを宗族というより広い範囲から見た場合には、族内で誰かが官僚であるという実態は維持されており、その意味で范氏は士大夫家族としての家柄を維持していた。

(9) しかし、その実態を見れば、時代が進むにつれて官僚である者の数は少なくなり、范氏は少数の官僚、士大夫と大多数の士人、庶民に分かれていた。その意味で宗族は科挙官僚輩出の基体だったのではなく、むしろそれを含む相互扶助組織とすることができる。また一面で、宗族は官僚を輩出した家柄を誇る象徴、すなわちステータスシンボルでもあった。

(10) 范氏の男子人口や婚姻、生育を計量的に分析した結果、彼らは北宋時代に急激に人口が増加し、南宋には安定し、元代に再び増加したことが明らかになった。これは彼らの立場や身分に因るところが大きい。また、彼らは概ね一夫一婦制であり、生まれる男子も3名以内が圧倒的である。よって、個々の家

を存続するのは容易ではなく、族内の継嗣が盛んに行われたことが判明した。

(11) さらに彼らの族譜である『范氏家乗』の資料的価値を検討した結果、この族譜は、直接的には明清時代の編纂に係る資料であるが、その資料保存は遠く宋代にさかのぼることが明らかとなった。その意味で、范氏の族譜は宋代史料としても有効であることが判明した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

遠藤 隆俊、明清族譜の史料性、史料学の方法を探る(愛媛大学) 査読無、17巻、2018、pp31-39

遠藤 隆俊、宋代士大夫的秩序と構造、北京師範大学学報、査読有、2017年1号、2017、pp115-126

遠藤 隆俊、宋代士大夫の秩序と構造 - 范氏十六房の形成 -、東北大学東洋史論集、査読無、12巻、2016、pp157-180

[学会発表](計7件)

遠藤 隆俊、宋代士大夫の家庭、家族、宗族、四国東洋学研究者会議、2017.12、徳島大学、徳島市

遠藤 隆俊、明清族譜の資料的価値、資料学研究会、2017.11、愛媛大学、松山市

遠藤 隆俊、宋代范氏の人人口推移と婚姻、生育、国際シンポジウム「日常視野から見た中国宗族史」、2017.10、南開大学、中国天津市

遠藤 隆俊、宋代東アジア海域交流史、東アジア交流史国際シンポジウム、2016.11、韓国東アジア文化センター、韓国全州市

遠藤 隆俊、宋代士大夫の階層移動について、史学研究会、2016.10、広島大学、広島市

遠藤 隆俊、宋代東アジア史研究、国際東アジアシンポジウム、2015.10、韓国アジア歴史財団、韓国ソウル市

遠藤 隆俊、日中家族の比較研究、北京師範大学歴史学セミナー、2015.4、北京師範大学、中国北京市

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

遠藤 隆俊 (ENDO, Takatoshi)
高知大学・教育研究部人文社会科学系教育
学部門・教授
研究者番号：00261561

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

徐 仁範 (SEO, Inbeom)
韓国 東国大学校・文科大学・教授

常 建華 (CHANG, Jianhua)
中国 南開大学・歴史学院・教授

游 彪 (YOU, Biao)
中国 北京師範大学・歴史学科・教授